

レクリエーション活動援助法の授業を
受ける前と受けた後での学生の気持ちの変化

How Students Change Their Minds Before and After
Attending the Class of Recreational Activities Assistance Act

矢 花 光
Hikaru YABANA

はじめに

福祉現場におけるレクリエーション援助とは本来、介護の専門職が介護を必要とする人（以下：利用者）に対して、一人ひとりに合わせた（個別の）ケアプランに添って援助を行っていくものである。その流れはアセスメント assessment（事前評価）に始まって、計画：プランニング planning, 実施：インプレメンテーション implementation, 評価：エバリュエーション evaluationとして進められていく。

介護福祉士養成課程の中の介護実習第2段階において学生は、施設でのレクリエーション援助を行うこととされている。しかし、ここでのレクリエーション援助は先に述べた個人を対象としたものというよりは、複数の利用者を対象とする集団レクリエーション援助を行うことがほとんどである。そうなってしまう理由には以前からの集団レクリエーションの流れが濃く残っていることや、慢性的な人手不足の状況にある介護の現場では一人一人個別に関わる時間をもつことが難しいことなどが考えられる。そのような中介護実習に入る学生も、施設業務の中に埋没せざるを得ず、自然と集団を対象としたレクリエーション援助を計画、実施、評価することになる。

そのため、レクリエーション活動援助法の授業においては、集団レクリエーション援助の実施に重きをおいて、学生が複数の人前に出てレクリエーション援助を実践することを第一として、授業を展開している。

目的

学生がレクリエーション活動援助法の講義を受ける前、つまりレクリエーション援助に関する知識がほとんどない状態でレクリエーション援助を実施する上での気持ちと、授業を行いレクリエーション援助に関する知識や体験を経たうえで、実際にレクリエーション援助を実施しようとする時の気持ちに変化があるのかどうかを検証するものである。そして、そのことからレクリエーション活動援助法の授業において、どういったことを学生が学びたく思っているのかを、またこれまでの授業の進め方で学生が実習前に人前でレクリエーション援助を実施することに、どの程度の緊張感や不安感等を解消するものとなっているのか、いないのか。逆に不安を増長する授業になってはいないか等を確認し、今後の授業にはどういったことを学生に教授し、より学生のためになる授業には何が必要かを検証するものである。

対象と方法

本学人間生活学科人間福祉専攻、レクリエーション活動援助法受講者2年生21名（男性2名、女性19名）を対象とした。調査時期はレクリエーション活動援助法の最初の授業時2009年4月10日及び、学生同士でのレクリエーション援助を互いに体験し、誰もが1度は人前に出てレクリエーション援助を体験した2009年9月11日の2回、それぞれ授業内でアンケートを行った。アンケー

ト内容はレクリエーション援助を2段階実習で行うにあたって、レクリエーション活動援助法の講義を受ける前の気持ちと講義を受けて実際に学生相手にレクリエーション援助を実施した後の気持ちについて、次の項目から選ぶようにした。レクリエーション援助を行うのは、

- ①嫌である ②緊張する ③不安である ④怖い ⑤失敗したらどうしよう ⑥出来るのかな ⑦おもしろい ⑧楽しみ ⑨笑顔がみたい ⑩成功したい ⑪その他

さらに、講義前講義後のアンケートにはそれぞれ今の気持ちを自由書いてもらい、講義後のアンケートにはさらに、授業において必要と感じた内容及び演習を記入してもらった。

結果

気持ちの項目として圧倒的にほとんどの学生が③不安である、⑥出来るのかな、といった自信のない項目のポイントが高く、ついで②緊張する、⑨笑顔がみたいの順だった。

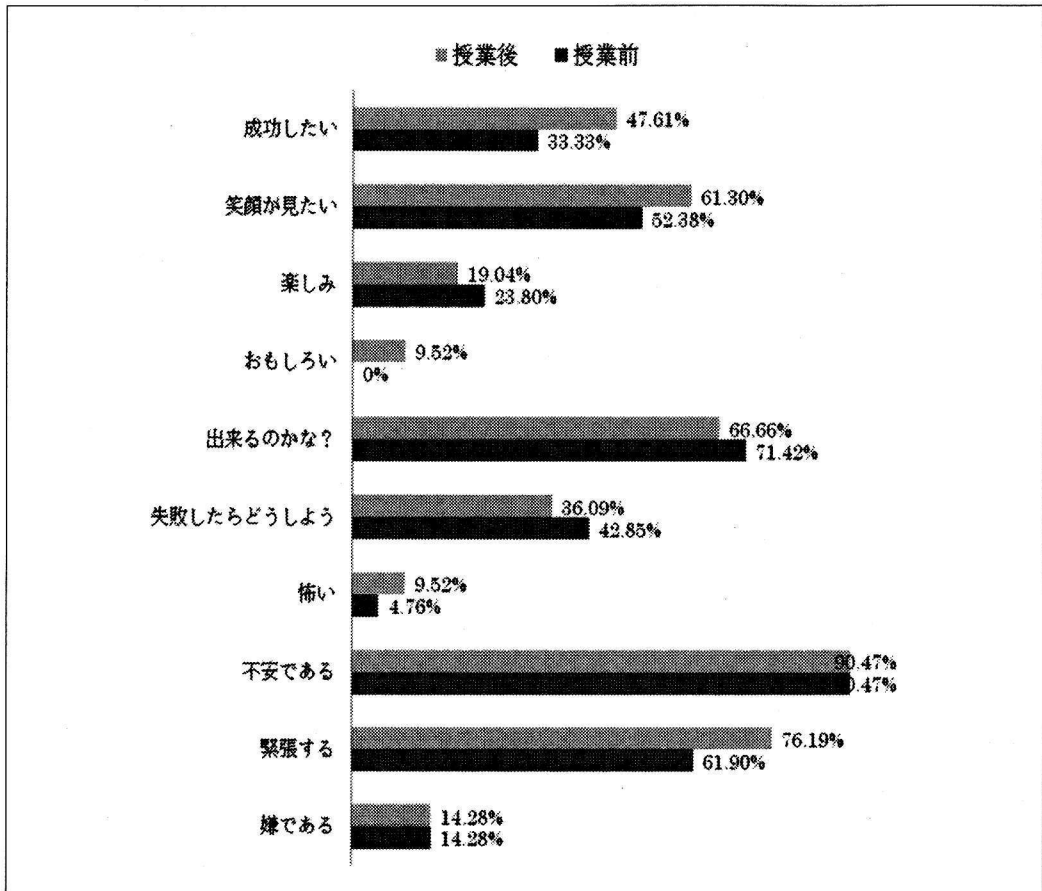
次に授業前と授業後での気持ちの変化をみると、授業前後での気持ちに変化が見られなかった項目としては①嫌である、③不安である、だった。授業前よりも授業後のほうがポイントが上がった項目としては、②緊張する、④怖い、⑦おもしろい、⑨笑顔がみたい、⑩成功したい、という結果だった。逆に講義前よりも講義後のほうがポイントが下がった項目は⑤失敗したらどうしよう、⑥できるのか、⑧楽しみ、といった結果になった。

自由記載を分析すると、授業前のアンケートでは「苦手」「不安」「わからない」「知らない」「楽しんでもらえない」「避けたい」「行きたくない」「負担になる」「問題が多い」「思うように出来ない」「うまく喋れない」「笑顔がひきつる」「説明がうまく言えない」「好きじゃない」「マイナスに考えてしまう」「失敗したらどうしよう」等といったマイナス（悪いほう）に考える言葉のキーワードが42あった。それに対して同じアンケートで「笑顔がみたい」「頑張りたい」「凄く楽しみ」「喜んでもらいたい」「一緒に楽しみたい」等とプラス（前向き）に考える言葉のキーワードは28だった。

自由記載の授業後のアンケートでは「出来るか心配」「楽しんでもらえるか不安」「心配になった」「やりたくない」「怖い」「何をしてもいいかわからなくなる」等のマイナス（悪いほう）に考える言葉のキーワードは22あり、「成功したい」「楽しく盛り上げたい」「講義を活用したい」等のプラス（前向き）に考える言葉のキーワードは21あった。

このことは授業前のアンケートではマイナス思考のキーワードがプラス思考を大きく上回ったが、授業後のアンケートではマイナス思考とプラス思考のキーワードの数がほとんど同じといった結果になった。これはレクリエーション活動援助法の授業において、多少は学生のレクリエーション援助に対するマイナスのイメージをプラスに塗り替えるものとなったと考える。

レクリエーション援助を行う際の気持ち



考察

今回の調査は調査人数が少ないことから信憑性は定かではないが、多くの学生がレクリエーション援助を実習で行う際には、不安な気持ちを抱きながら援助していることが伺えた。「不安である」のポイントは授業前も授業後も値が変わらないことは、これまでの授業の方法では不安感を解消することにはならないことがわかり、今後の授業内容の課題である。

授業後にポイントが上がった項目としては「緊張する」があり、これは実際に授業内で学生を相手にレクリエーション援助を演習として実施したことから感じた気持ちであると考えられる。人前に出てレクリエーション援助を行うことがいかに緊張を伴うものであるかを体験してみてわかったことであろう。これは「怖い」という項目のポイントの変化からも明らかであると考えられる。また、授業後にポイントがあがった項目としては「笑顔が見たい」「成功したい」があり、この二つは授業でレクリエーション援助を体験したことからわかったレクリエーション援助を行うことでの楽しみや喜びを、利用者にも味わって欲しいといった気持ちの現れであると考えられる。さらに、授業前には0%だった「おもしろい」が僅かではあるが、授業後には9.52%になったことは、レ

レクリエーション活動援助法の授業を受けたことでレクリエーション自体のおもしろさを理解した学生がいたからだと考える。

逆に授業後に、ポイントが下がった項目として「失敗したらどうしよう」「出来るのかな」という項目があり、これはレクリエーション活動援助法の授業を受けたことによってレクリエーション援助に自信をもつ学生が僅かではあるがいたと考える。しかし、その一方で「楽しみ」であるのポイントが若干ではあるが下がったことは、レクリエーション援助が「楽しみ」だけでは実施できないことを感じた学生の存在が伺い知れた。

レクリエーション援助は、人と人とのコミュニケーションと人から人への援助を基盤として成り立っている。レクリエーション援助者（以下：援助者）にとって何よりも重要なことは、自分自身を対人援助の媒体としてふさわしく開発することであると考えられる。その人間的資質としては、①自他への信頼と愛情があると考えられる。自分と他者の双方を信頼することが出来、愛することのできる援助者は、利用者との関係を避けたり閉ざしたりせず、心をオープンにして接することができる。そして、利用者の主体性や個別性を大事にしながら自立と自己実現を促すという、理想的な援助を実施することができると思われる。2つ目の人間的資質としては②熱意と誠実さであると思う。レクリエーション援助職の誠実さを決めるのは、外的報酬の有無ではない。外的報酬の獲得以外に、他者を思いやり、他者の役に立ちたいという気持ちが、動機としていかに強く働いているかがレクリエーション援助職の資質として問われていると考える。次の人間的資質には③余裕のある落ち着いた態度が必要である。相手のペースに合わせながら、余裕のある態度で関わるのが基本であると考えられる。さらに備えるべき人間的資質としては④適度な心理的距離をもつことである。援助者は温かいが決して馴れ馴れしくはなく、同時に、冷静でありながら決して冷たくはないという、理想的な態度を実現することが必要で、これは適度な距離によって実現できるものと考えられる。この適度な距離とは、人間としての温かさが伝わるのと同時に、相手を客観視することができるような、相手との心理的距離のことだと思える。最後の人間的資質として⑤学習への意欲が必要だと思える。援助のための豊富な知識と高度な技術をもっていることこそ、レクリエーション援助を展開する専門家の専門家たるゆえんである。レクリエーション援助の現場では、有効な援助法が確立されていない問題に、試行錯誤的な学習による解決が図られることもあるが、多くの場合に必要とされるのは、援助者の洞察的な学習能力である。利用者の問題を客観的に把握し、その背景を探り、計画的に援助したうえで、その効果を評価しようとする援助過程は、洞察学習による問題解決の過程だといえると思える。こうしたレクリエーション援助を行う上で大切な人間的資質といった視点が、自分のこれまでのレクリエーション活動援助法の授業において欠けていた点であることを今回の調査から痛感した。失敗をおそれずに堂々と、元氣よく、笑顔で援助することの教授に欠けていたように思う。

まとめ

本研究を行って、いかに自分が初めてレクリエーション援助を実施しようとする学生に対して、目先のレクリエーション援助を実施することのみに囚われていたかを理解した。誰であれ初めてのことで、人前に立つ時は緊張し、不安を抱くものである。そうした不安を解消するには、ただ人前に立つことを経験することで克服されるものではないことがわかった。不安の解消には援助者としての人間的資質を学生に教授し、利用者との適度な距離感を保ち、失敗することは何も悪いことではなく、失敗から多くのことを学ぶ機会となることを伝える。成功させることはない、大切なのは一人一人に目を配り、洞察力・観察力によって利用者のニーズ（必要性）に応えることを教授する必要性を感じた。

そして学生からの授業において必要と感じた内容及び演習に書かれていた、「歌（演歌・童謡）をもっと教えて欲しかった」や「簡単な体操を教えて欲しい」「先輩が実施したレクリエーション援助を教えて欲しかった」といった内容を取り入れながら、レクリエーション活動援助法の授業を今後展開していけたらと考えた。

最後にレクリエーション援助とは利用者の生活全般を見つめ直し、楽しい時間を作り上げ共有するものであると考える。この援助は利用者と援助者双方の生活において必要不可欠で、日常生活に潤いをもたらす大切なものである。対人援助技術の一つとしてレクリエーション活動援助法がこれまでは、介護福祉士養成課程の科目として教授され、また介護福祉士国家試験科目の一つとされてきたが、今後の介護福祉士養成課程の新カリキュラムから外れたことに対しては、深い不安と悲しみを覚えた。

参考・引用文献

- (1) 藪田碩哉, 千葉和夫, 小池和幸, 浮田千枝子: 福祉レクリエーション援助の方法, (財)日本レクリエーション協会, 2000
- (2) 藪田碩哉, 千葉和夫, 小池和幸, 浮田千枝子: 福祉レクリエーション援助の実際, (財)日本レクリエーション協会, p. 65-75, 2000
- (3) 月刊レクリエーション, 2010年2月号 NO. 606, (財)日本レクリエーション協会,
- (4) 月刊良質生活, 2010年2月号 Vol. 12, (財)日本レクリエーション協会,
- (5) 錦祐二: 高齢者の寄りそい介護 考え方・進め方, 黎明書房, 2009
- (6) 黒澤貞夫: 人間の尊厳と自立, 建白社, 2009
- (7) すべての人に楽しみを届ける, (財)日本レクリエーション協会, 2002